

「……なるほど。メンバーズボイス通りですね」

「…は？」

呆ける俺に杏奈ちゃんはキツと怖い顔になった。

「あなた、私のことずっとエッチな目で見てましたよね？私そういうのわかるんです」

「えっ！そ、そんなことは……」

確かにさっきから彼女のおっぱいばかり見ている。なんなら裸まで想像して股間も少し反応してしまっている。

「他の女性会員さんから苦情があったんですよ。最近スタジオレッスンやマシン中にしつこくいやらしい目で見ってくる人がいるって。名指しじゃありませんでしたが、遠回しに青木さんって分かるように。複数件来てます」

嘘だろ。ただでさえ汗まみれのセクシーな女がたくさんいるなら、こっちはそれ目当てだって判ってるだろうに。スタジオにはイケてる洋楽が流れているが、俺の心には冷や汗が流れていた。

「青木さん、運動しないならもう来ない方がいいですよ？セクハラです」

「そんな……」

くそう、なんだってこんな、こんな小娘に。俺はさっきまでしていた妄想の続きをして